

## 令和4年産米の1等比率と今後の対策

令和4年産米の1等比率は、特にコシヒカリで低くなりました。原因は後述するように、登熟期（出穂期から成熟期）の高温が考えられます。近年、温暖化が進行しており、今年も水稻の生育期間は高温になる可能性があります。そのことを前提にしたイネづくり（特にコシヒカリ）を心がけましょう。

### 1. 令和4年産コシヒカリ1等比率は60%以下！（1等比率は令和4年12月31日現在）

表1のように、茨城県の令和4年産米の1等比率は、早生品種の「あきたこまち」「ふくまる」、中生の「にじのきらめき」、晩生の「あさひの夢」は85~90%と高い値でした。それに対し、コシヒカリは59.3%と低い値となりました。1等比率が低い主な理由は、白未熟粒（乳白粒、背白粒、腹白粒、基白粒など）が多かったことです。

表1 令和4年の茨城県産水稻主要品種の1等比率（%）

品種	一番星	あきたこまち	ふくまる	コシヒカリ	にじのきらめき	あさひの夢
1等比率	93.7	85.3	87.8	59.3	86.6	90.3

注) 農林水産省HPより。令和4年12月31日現在。

### 2. コシヒカリ1等比率の低下の原因は登熟期の高温

水稻は、出穂後20日間の日平均気温が27℃を超えると白未熟粒が多くなります。図1のように、令和4年は、生育期間全般が高温で、特にコシヒカリの登熟期間（出穂期から成熟期）は27℃以上の日が続きました。

コシヒカリは高温に強くないので、この高温により白未熟粒が増加し、1等比率が低下したと考えられます。

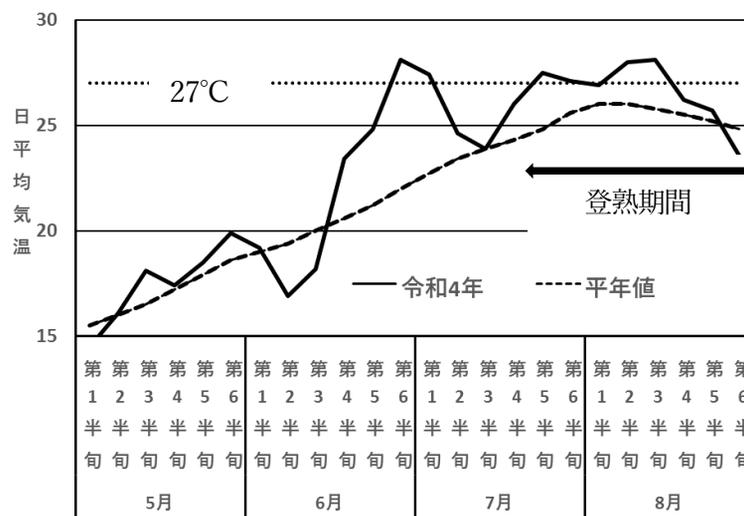


図1 コシヒカリ栽培期間の日平均気温（℃）

注) 水戸気象台のデータ

### 3. 温暖化は進んでいる！

図2は、過去15年間の7月上旬から9月中旬の日平均気温を5年単位で見たものです。コシヒカリの登熟期にあたる7月下旬から9月上旬頃は、最近の5年間で最も高くなっています。

このことから、温暖化は確実に進んでいることがわかります。

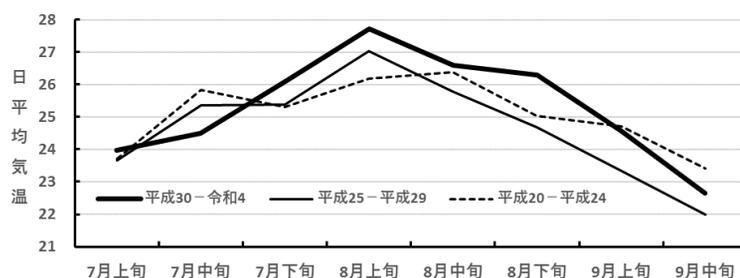


図2 夏季の旬別日平均気温の変化（5年間の平均の比較 °C）

注) 水戸気象台データ

### 4. 1等比率は低下傾向？

図3に、これまで10年間のコシヒカリ1等比率を示しました。平成25年から30年までは、27年の85%とやや低い年もありますが、ほとんど90%台で安定していました。しかし、令和元年から3年間は80%前半と低くなり、4年は59.3%と大きく低下しました。

今後の気象の予測は困難ですので、1等比率がどうなるかわかりませんが、温暖化が進んでいることから、十分な注意が必要です。

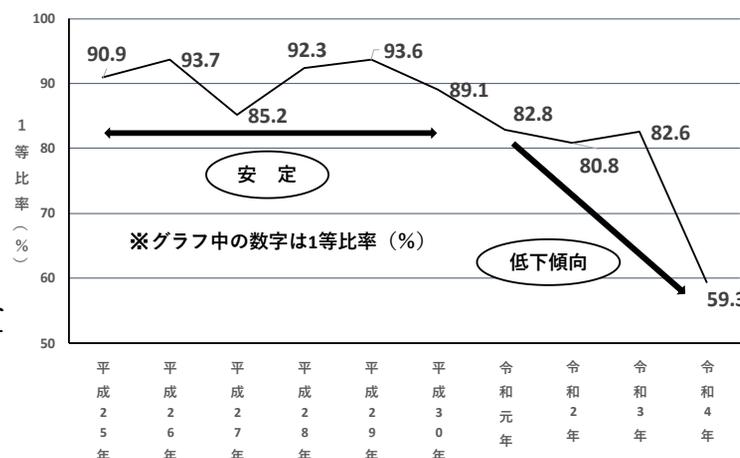


図3 コシヒカリ1等比率の推移

### 5. 暑さを意識したイネづくりを！

近年の水稻栽培期間、特に登熟期間は、毎年のように暑い日が続きました。令和5年も暑い夏になることを意識したイネづくりを行い、1等米の高品質生産をめざしましょう。

高温対策の基本は、①十分な養分吸収ができるように環境づくり（十分な作土深など）や施肥を行う、②根を健全にするための水管理（中干やその後の適切な間断かんがいなど）、③水稻を冷やす効果があるケイ酸施用などです。詳しくは、本年1月6日発行の営農News 3010号「水稻の収量・品質向上を目指しましょう」をご覧ください。また、今後発行する営農Newsも参考にしてください。

■ 農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。

■ 営農NEWSはJA全農いばらきホームページでもご覧になれます。